

上村和子 活動レポート

うえむら かずこ

こぶしの木 No.88

9月議会報告

2021年11月30日発行



「コロナ禍の中での成果と課題にしばって質問」

市議会決算特別委員会では、2020年度国立市一般会計について、コロナ禍の中での特筆すべき成果と今後の課題にしばって質問しました。

決算委員会 2021.10.1-5

学校が一斉休校になった時に、学童保育を長期休暇対応に切り替え、対象児童の枠も広げて受け入れたこと、市役所が5月の連休や年末年始も休まず、市民相談と生活物資支援のための窓口を開いたこと、第2波からは、公民館、図書館等の社会教育施設を開け続けたこと、自宅療養者への生活物資支援や医療相談対応などの個別支援をいち早く始めたこと、市民のコロナ相談会などに積極的に出向き、生活保護や相談に早期から対応しようとしたこと、迅速なワクチン確保体制だけではなく、コロナにかかわる人権相談窓口も創設したことなど、庁内が連携しながら、また職員が主体的に、一人一人の市民に寄り添う取り組みを続けたことを評価し、一方で見過ごせない給食

センター建て替えの問題を指摘した上で、決算を認定しました。

職員が自分たちで判断し、課題を見つけ、解決策を見つけていく力

2020年度一般会計決算を認定しました コロナ禍の中、職員の主体的な市民に寄り添う取り組みの継続を評価

国立市議会議員 上村和子

数分しか答弁時間がない中で、関係職員全員が真剣に自分の言葉で総括してくれました。

答弁に共通していたのは、国や他の自治体を見てというだけでなく、自分たちで

に素早く察知して国立の状況に当てはめ、一歩でも半歩でも前に施策を打ち立てることができると、このトレーニングが問われた1年であったと述べました。また竹内副市長は、行政の力が試される年度であった。そしてそれは人の力であり、それがいかに重要であるか身にしてみてわかったと発言。職員の働きの重要性について語った答弁は他にいくつもありません。

人権行政は危機の時ほど力を発揮する

国立市民を孤立化させない、寄り添い続ける姿勢を示し、動き続ける力は一朝一夕にはできません。大川健康福祉部長は「ふだんからの周囲との協力関係の積み上げが生きてると感じたと述べ、平時からそのような動いていたからできた、と現場からの実感を語りました。

私は長年、ソーシャルインクルージョン（人権行政）は危機の時ほど力を発揮する、と言いつづけてきました。今回の新型コロナウイルス感染症パンデミックへの行政としての動きは、まさにその成果があらわれたと評価します。

今後の課題もいくつも出されましたが、それを必ず次の計画に変えて、更なる市民が安心して暮らせる日常と、危機に強い市役所を作っていくってほしいと考えます。私も議員としてしっかり関わっていきます。

何かあった時、相談すれば道が開ける国立市役所に

いま話題の、「市役所の理想」と言われるドキュメンタリー映画「ポストン市庁舎」に並ぶともひけをとらない、何かあったら市役所に相談すれば道が開ける、そんなソーシャルインクルージョンの国立市役所をつくれると確信しています。

まだ男女別名簿の市立校が複数あると判明！

コロナとは別の問題ですが、今回、国立市の小、中学校の名簿の状況について質問したところ、また男子児童生徒を先にした男女別名簿の学校が複数あることが判明しました。教育委員会からは、ジェンダー平等、セクシャルマイノリティの児童生徒への合理的配慮も考慮し、来年度から全校男女混合名簿にするとの答弁がありました。